

2020.2.15（土）14：00～15：30

於：大田文化の森 ホール

記念館講座 ～龍子・熊谷恒子・山王草堂・尾崎士郎記念館の学芸員による講演～

令和元年度第3回「龍子と青龍社に集った者たち」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

■川端龍子の制作活動

1885（M18）年 6月6日、和歌山市に生まれる（本名：昇太郎）

1913（T2）年 渡米、帰国後に日本画家に転向

1915（T4）年 30歳の時、再興第2回日本美術院展に入選。その後、院展の花形として活躍

1929（S4）年 院展脱退の翌年、自らの美術団体青龍社を設立

1945（S20）年 自宅が戦災に遭ったにも関わらず、終戦後2か月後に第17回青龍展を開催

1963（S38）年 文化勲章受章と喜寿を記念し、龍子記念館を設立

1966（S41）年 4月10日 80歳で逝去。青龍社も龍子の死とともに解散する。

1. 龍子の青龍社創立まで

■出発点は「御形（ごぎょう）塾」にあり

日本画家として注目を集め始めた30代半ばの龍子は、大森・新井宿に新居を建てることを決意。1920（大正9）年に自身の設計で自宅兼アトリエ「御形荘」を建て、そこには院展で活躍する龍子に憧れを持った若い画家たちが集まり、「御形塾」として龍子は運営し始める。

■龍子の院展脱退

「大観から偏愛という言葉がふさわしいほどの重用」、「一に川端、二に龍子」、「院の人気は川端龍子一人でさらった傾きさえあった」と言われるほどの活躍を院展でしていた龍子（「美術國展望（3）」『東京日日新聞』1929年9月14日）

↓

院展での自分は「鶏に孵（かえ）された家鴨の子」として1928（昭和3）年9月26日、第15回再興院展会期中に脱退を申し出た。

脱退の理由として ・どんなに活躍しても、結局は「外様」扱いだっただ。
・巨大化していく作品への識者たちからの批判

■青龍社の創立

1914（大正3）年に、横山大観らによって再興された日本美術院は、官設の展覧会に対抗する美術団体。そこを脱退するという事は在野のさらに外に出ること

↓

御形塾の13名とともに、1929年6月28日に龍子は青龍社を創立した。

「青龍社」の意味・・・「青龍が東にあたって居ますから、東方の芸術を意味するもの」

川端龍子『龍子画業二十五年 青龍社とともに』美術出版社、1953年

「お山の大将として此の点で青龍社に采配を振る文句は 繊細巧緻なる現下一般的の作風に対しての健剛なる芸術に向かつての進軍である」 川端龍子『第一回青龍展出品目録』1929年

2. 青龍社の注目すべき画家たち

■青龍社を脱退し独自の道を切り開いていった画家たち

福田 豊四郎 (1904-1970)・・・御形塾に学んだ龍子の最初期の弟子。1933年に脱退するも、創造美術(現・創画会)の設立に携わるなど、戦後の日本美術を牽引した。

落合 朗風 (1896-1937)・・・1931年に初出品で、青龍社の最高賞「青龍賞」を受賞。1934年に脱退、明朗美術連盟を設立した矢先、1937年に40歳の若さで逝去。

横山 操 (1920-1973)・・・1940年に入選するも召集され、その後シベリア抑留に遭う。1950年復員すると、連続入選を果たし1956年には青龍賞を受賞。1962年に脱退。

その他にも、岩橋 英遠 (1903-1999) 丸木 位里 (1901-1995) ら、近代日本美術を代表する画家

■青龍社で活動を展開した画家たち

安西 啓明 (1905-1999)・・・御形塾に学び、第1回青龍展へ出品。龍子の死とともに青龍社が解散するまで同社で活動を続けた。解散後は、無所属で活動する。

小島 鼎子 (1898-1964)・・・御形塾に学び、第1回青龍展へ出品。死の前年となる1963年まで、4人の子を育てながら制作を続け、35回連続出品を果たした。

その他にも、岡 信孝 (1932-)、牧 進 (1936-) といった現在も活躍する画家

3. 青龍社の解散とその後

「青龍展なる固有名詞は龍子が墓の中へ持って往くといふこととなるのである」(『第35回青龍展出品目録』1963年)という宣言に基づき、龍子の没年、1966年5月に青龍社は解散する。

↓

その宣言に続く一文で、「健剛なる精神面だけは断じて受け継いで欲しい。そして青龍展無き後は、よき同志と筆硯を改めて、また新しい旗幟をいさぎよく翻して貰いたい」と龍子は述べている。

■東方美術協会

1966年6月28日 時田直善 (1907-2000)、結城天童 (1913-2011) ら十一人の青龍社・社人によって創立された団体。1969年から参加し、現在、同協会で中心的な役割を担う高頭信子 (1929-) は、「師の健剛なる精神を受け継いでいきたい」と話す。

○まとめ

毎年秋に37回にわたって開催された「青龍展」には、261名、1951点の作品が出品された。

青龍社の活動は、「近代日本画壇の第三の道の開拓であった」(河北倫明『読売新聞』1966年4月11日)とも言われている。

↓

青龍社の歴史は37年で幕を下ろしたのではなく、日本の近代美術に確かな様式を根付かせ、新しい日本画を生み出そうとする画家たちの中に、今もその「健剛なる精神」が息づいている。

★龍子記念館からのお知らせ

○展示情報：名作展「身体のありか 龍子の人体表現をめぐって」3月22日(日)まで
次回展「旅行く心 龍子が描いた日本の風景」は4月4日(土)～

※「第30回馬込文士村大桜まつり」が開催される4月5日(日)は入館無料

○広島県立美術館で「衝撃の日本画 川端龍子展」が、4月2日(木)～5月31日(日)に開催